乳幼児肌着に関する保護者の意識調査

Parental Awareness Survey of Infant Underwear

奥脇　菜那子*　　松梨　久仁子*　　谷　祥子**　　田中　聖子***
Nanako Okuwaki　　Kuniko Matsunashi　　Shoko Tani　　Seiko Tanaka

*家政学部被服学科　**鎌倉女子大学　***株式会社ナチュラルサイエンス

抄　　録　本研究は乳幼児の保護者を対象に，乳幼児の肌着購入にあたっての意識調査を行い，乳幼児の肌トラブルの実態や肌トラブルの原因となる衣服の特徴，肌着の購入にあたって重視する点について報告したものである。肌トラブルを経験する乳幼児は多く，特に 1 歳以上の幼児になると肌トラブルを経験した割合が多くなることがわかった。肌トラブルの原因としては，衣服に付属しているタグ，生地との摩擦，縫い目との摩擦が多かった。子どもの肌着の選択時には素材を重視しており，特に綿 100%であることを重視する保護者が多かった。素材に求める機能性としては，肌触りのよさ，動きやすさ，サイズ，着替えのしやすさなどが重視されていたが，デザイン，価格，生産国，ブランドは重視されてなかった。縫い目に関しては重視する保護者が多く，皮膚刺激をできるだけ軽減したいと思っていることがわかった。

キーワード：乳幼児，肌着，縫い目，意識調査，アンケート調査

Abstract　This study conducted a survey of parents of infants regarding their attitudes toward purchasing underwear for their infants, and reported on the actual conditions of skin problems among the infants, the characteristics of clothing that cause skin problems, and what the parents consider important when purchasing underwear. It was found that many of the infants experienced skin problems, and the percentage of infants who experienced skin problems-increased, especially for infants over one year old. The most common causes of skin problems were friction with tags attached to clothing, friction with fabric, and friction with seams. When selecting underwear for their infants, many parents placed importance on the material of the garment, particularly that the garment be made of 100% cotton. The functionality required of the material, such as good texture, ease of movement, size, and ease of changing, was important, while design, price, country of production, and brand were unimportant. Many parents placed importance on seams, indicating a desire to reduce skin irritation as much as possible.

Keywords: infants, underwear, seams, awareness survey, questionnaire survey

1．緒言

衣服の着用において，衣服と皮膚との摩擦や衣服による圧迫などが物理的刺激となり，肌トラブルを起こすことがある [1),2)]。特に，乳幼児の皮膚は大人に比べて角質層が薄くバリア機能が低く，皮膚表面は容易に傷つきやすいため，皮膚トラブルを起こしやすい [3)]。そのため，皮膚と直接接触する肌着の選択については特に慎重になる必要がある。衣服による皮膚障害に関する研究には，皮膚障害の実態調査 [4)~8)]，皮膚障害の現状と原因究明 [9)] などの報告がみられる。これらの研究における調査対象者の年齢は 10 代や成人であり，どのような衣服で皮膚障害を生じたかという点に着目している。また，物理刺激よりもアレルゲンや染色や加工の際の薬品に起因する化学刺激を主に対象にしている。

本研究における調査対象は乳幼児とし，衣服は肌に直接触れる肌着について検討することにした。乳

幼児用の肌着については，着用の実態を調査し，サイズと実際の体型との比較についての研究が報告されている[8)]。調査対象である乳幼児は自分で着心地や不快感を伝えることができない。そこで本研究では，乳幼児の保護者を対象に，子どもの肌着の購入に際し，重視している点やこだわっている点などについてのアンケート調査を行うことにした。併せて，子どもの肌トラブルの実態についても調査し，肌トラブルの原因となる衣服の特徴を抽出する。

２．方法

2-1　調査対象者と調査方法

調査対象者は未就学児の子どもの保護者で，対象施設は本学附属豊明幼稚園，きららっこ石神井公園保育園（練馬区），のびっこ保育園（さいたま市），本学附属機関さくらナースリーである。その他に，子どもを持つスキンケアメーカーの社員，スキンケアメーカー主催の幼児保護者向け肌育イベント参加者に調査を依頼した。

調査方法は質問紙留置法である。上記の調査対象者に対し，「乳幼児肌着に関するアンケート」というアンケート用紙を幼稚園の教諭や保育士らを介して配布し，2 週間程度の期間を置き，回答済みのアンケート用紙を回収した。

調査期間は 2016 年 10 月～2017 年 2 月である。

2-2　調査項目について

調査項目は回答者の属性と，①子どもの肌着や衣服による肌トラブルの経験の有無，②肌着の素材や機能性を重要視するか，③デザインや着替えやすさで重要視するポイント，④縫い目部分を意識するか，などである。

３．結果および考察

3-1　回答者の属性

有効回答数は 248 人（回収率 67.2%）であった。回答者の内訳は母親が圧倒的に多く，全体の 97%を占めていた。父親は 2%，祖母は 1%であった。年齢は 10 代から 50～59 歳まで幅があり，35 歳～40 歳が最も多く 34%，次に 30～34 歳と 40～44 歳がそれぞれ 18%であった。50～59 歳と回答した人は，父親と祖母であり，そのほかの年代はすべて母親であった。

3-2　子どもの肌トラブルについて

子どもの肌トラブルの経験の有無について，1 歳未満の回答結果を図 1 に，1 歳以上の回答結果を図 2 に示す。1 歳未満では「現在ある」が 5%，「以前はあったが現在は治っている」が 9%で何らかの肌トラブルがあった子どもは 14%で，86%が「全くない」と回答しているのに対し，1 歳以上では「全くない」が 26%にまで減っており，「現在ある」が 43%と大幅に増加していることがわかる。実際にどのような肌トラブルであったかについての回答の 1 歳未満と 1 歳以上の結果を図 3-1 と図 3-2 に示す。内訳としては 1 歳未満では「乳児湿疹」，「乾燥」，「赤み」，「あせも」，「かゆみ」の順で肌トラブルが発生しているが，1 歳以上になると「乾燥」が圧倒的に多くなり，「かゆみ」，「赤み」，「あせも」，「乳児湿疹」，「アトピー性皮膚炎」の順に肌トラブルを生じていることがわかった。

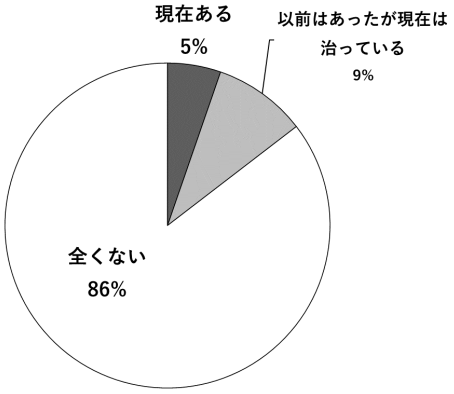

図 1　1 歳未満の子どもの肌トラブルの有無
（n=151）

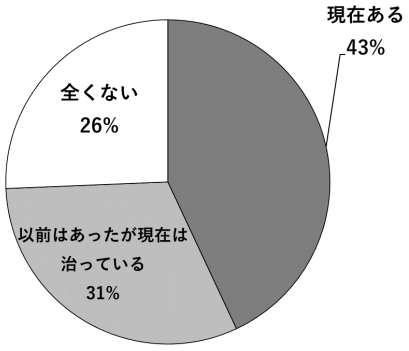

図 2　1 歳以上の子どもの肌トラブルの有無
（n=230）

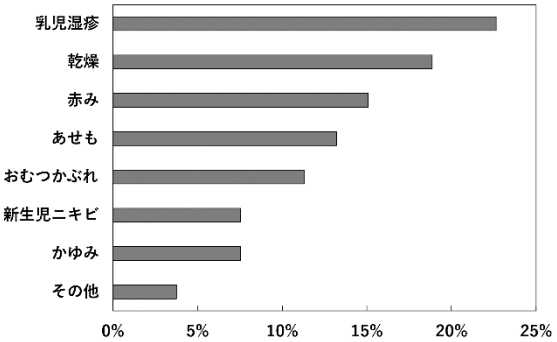

図 3-1　1 歳未満の子どもの肌トラブルの内容（n=146）

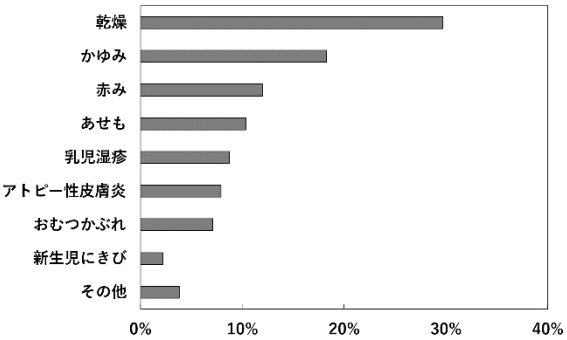

図 3-2　1 歳以上の子どもの肌トラブルの内容（n=211）

次に，肌着を含めた衣服による肌トラブルについては，「肌トラブルを起こしたことがある」子どもは 24%，「肌トラブルの経験がない」子どもは 86%であった。「肌トラブルを起こしたことがある」と回答した24%の人に対し，何が原因で生じた肌トラブルであったかについて質問した。その回答結果を図 4 に示す。「襟ぐりのタグ」に起因するものが53%で最も多かった。次いで「生地との摩擦」が40%であり，肌着の素材をトラブルの原因と考えている保護者も多いと考えられる。「脇部分のタグ」が 33%，「縫い目との摩擦」が 17%であった。タグは衣服部分の生地より硬く，皮膚に当たるとチクチクしたり，ひっかかるような感触があったり，健常な成人でも不快に感じることはよくあることであろう。これら 4 つの要因はいずれも皮膚の摩擦と関係している。また「ゴムによる締め付け」が 34%，「衣服全体の締め付け」が 2%で，特に局所的な圧迫が肌トラブルにつながっているといえる。「その他」として，「ファスナーとの摩擦」や「襟部分に汗がたまることであせもになる」などの記述があった。これらの回答から，肌トラブルには衣服との摩擦が大きく関与していることが明らかで，皮膚と衣服の摩擦刺激をできるだけ回避することは，乳幼児のみならず，敏感肌やアトピー性皮膚炎の人にとっても重要なことだといえる。また，複数回答している回答者が多く，肌トラブルの原因は 1 つとは限らず，複合的に影響していることがわかった。

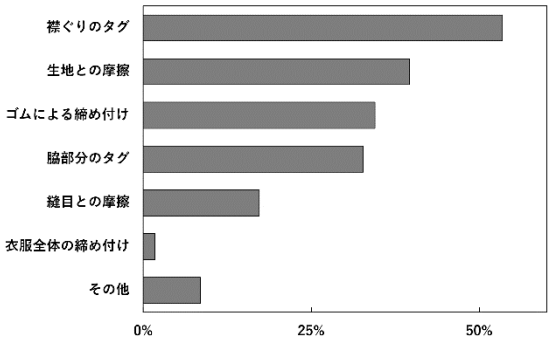

図 4　衣服による肌トラブルの原因（n=245）

3-3　肌着購入時に重要視する点について

子どもの肌着を購入する際，どのような点を重視しているかについての複数回答の結果を図 5 に示す。「素材」に関してはほとんどの人（99.2%）が「重視する」，「やや重視する」と回答していた。次いで，「肌触りのよさ」，「動きやすさ」に関しては95%以上の人が，「サイズ」，「着替えのしやすさ」に関しては約 95%の人が，「洗濯のしやすさ」に関しては80%以上の人が，「重視する」，「やや重視する」と回答していた。「肌触り」や「動きやすさ」の回答が多いことから，着用時の快適性を重視している。また，「サイズ」，「着替えのしやすさ」，「洗濯のしやすさ」の回答数も多く，機能面についても重要視している。「デザイン」，「価格」，「生産国」などはあまり重要視されておらず，「ブランド」にはあまりこだわっていないことがわかった。

ほぼ全員が「重視する」，「やや重視する」と回答していた素材について，どのような機能性を重要視しているかについての回答結果を図 6 に示す。「素材」に求める機能性としては，「肌触り」「やわらかさ」など触感に関する項目は，約95%の人が「重視する」，「やや重視する」と回答しており，「吸水性」

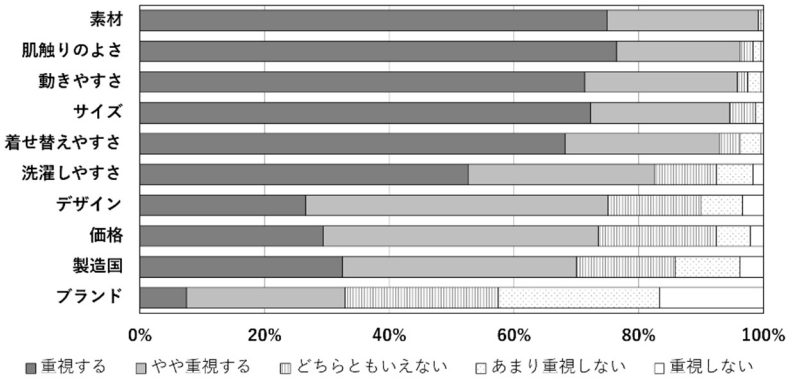

図 5　乳幼児肌着の選択時に重視する点（n=238）

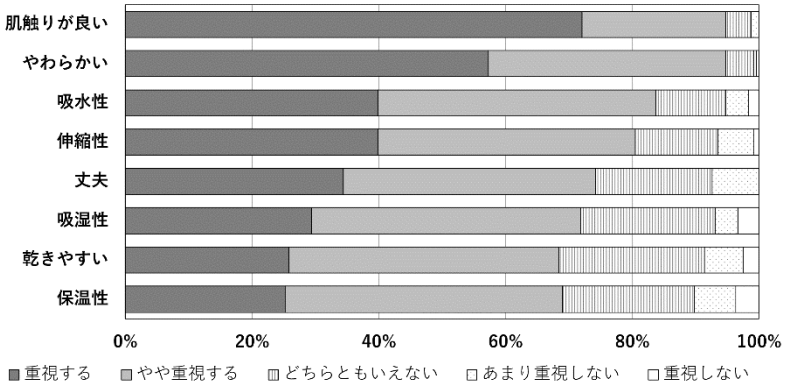

図 6　乳幼児肌着に求める素材の機能性（n=244）

を「重視する」,「やや重視する」人は約 84%であった。「吸湿性」,「乾きやすさ」,「保温性」を重視している人は 70%程度であった。手で触れてわかる「肌触り」「やわらかさ」や，汗を吸う「吸水性」など消費者にとってなじみやすい項目が上位となったと考えられる。

前述のように「素材」を重視する人は 99%以上であった。そこで，肌着の素材としてどのような素材を重要視しているかについての集計結果を図 7 に示す。図 7 から「綿 100%」であることを重視する保護者が 90%以上で非常に多いことがわかる。一方で「天然繊維 100%」を重視すると回答した保護者は約 43%ほどであることから，天然繊維というよりは綿へのこだわりが強いと考えられる。「毛 100%」や「絹 100%」を重視するという回答は全体の 2 割を下回り，これらの繊維は乳幼児肌着の素材としては望まれていないことが示された。また，オーガニック素材は約 48%の回答があった。オーガニックは肌に優しいというイメージが定着していると考えられる。通常の綿とオーガニックコットンの間で，特に機能面での違いはないが，一般消費者にはそのような認識はないことが結果として表れている。

肌着の布の種類としては，どのような布が適切と思うかについての設問の回答結果を図 8 に示す。「ニット(編地)」であることを重視するという回答は 20%以下であり，一方で肌着にはあまり使われていない「ガーゼ生地」を重視するという回答が 50%を超えていた。一般的に肌着素材としてよく使われている「ニット」の割合が低かった理由としては「ニット」と織物の違いを知らず、「ニット」をセーターのような編物だと認識している保護者多いと考えられる。上記のような傾向はスキンケアへの関心が高いと思われるメーカー社員や肌育を推奨する保育園の保護者らも同様であり，一般消費者は衣服素材に関する知識をあまり持っていないことがわかった。服に興味をもって入学してきた被服学科の 1 年生であって

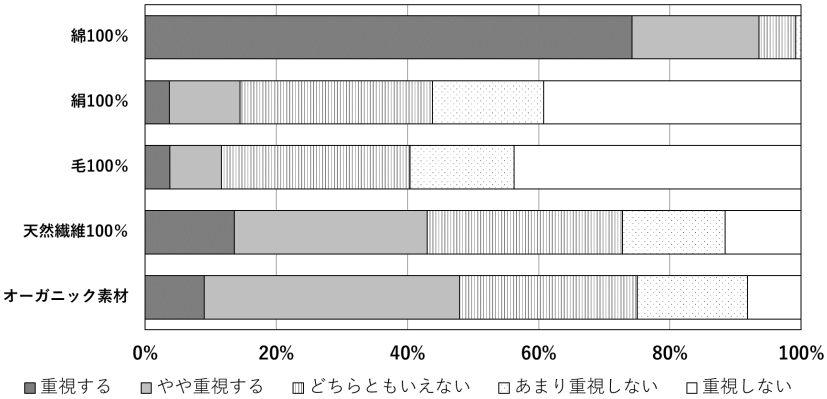

図７　乳幼児肌着の素材として適切だと思う繊維（n=248）

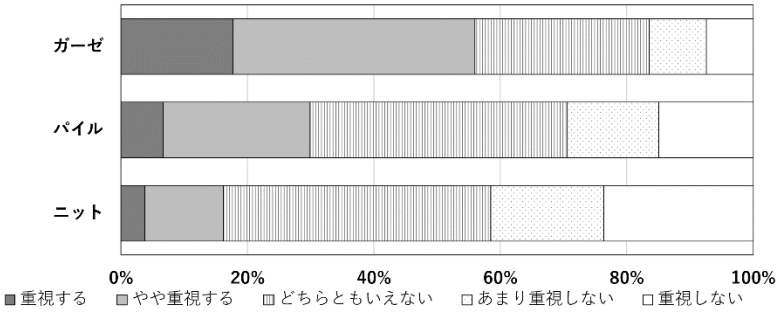

図８　乳幼児肌着の生地として適切だと思う生地の種類(ｎ=243)

も，織物とニット（編物）の違いを理解していない学生が多いこととともリンクするといえる。

次に「機能性素材」であることを重視するかについての回答結果を図 9 に示す。「重視する」が 13%，「やや重視する」が16%で，重視している保護者は 3 割程度しかおらず，機能性素材は肌着素材としてあまり適切ではないと考えていることがわかった。機能性肌着に関して，吸汗速乾素材と吸湿発熱素材について購入したいかどうかの設問にしての結果を図 10 と図 11 に示す。吸汗速乾素材は 6 割以上の保護者が「購入したい」と回答したが，「吸湿発熱素材」については 6 割以上の保護者が「購入したいとは思わない」と回答していた。

機能性肌着を購入したいと思わない理由としては，多くの保護者が『化学繊維であるから』『綿 100%ではないから』と記述していた。やはりここでも綿へのこだわりが強いことと，同時に化学繊維へ抵抗感を持つことがわかった。綿は肌に優しく，化学繊維は肌トラブルを引き起こすと思っている保護者が多く，医師からそのような指摘を受けたことがあるという記述も数件みられた。

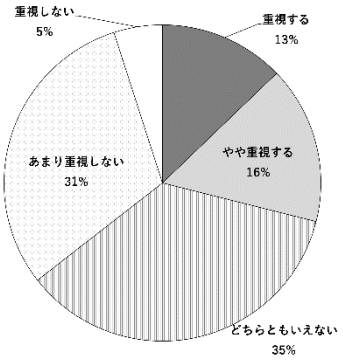

図９　機能性素材を重要視するかについての回答結果（n=242）

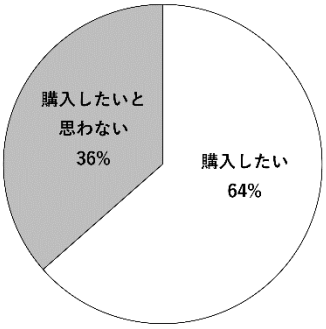

図 10　吸汗速乾素材の肌着を購入したいかについての回答結果（n=244）

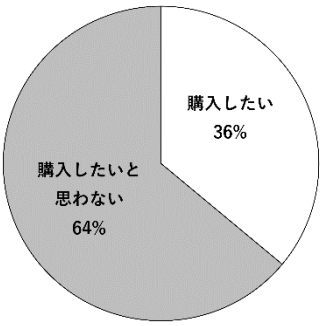

図 11　吸湿発熱素材の肌着を購入したいかについての回答結果（n=244）

化学繊維へ抵抗感を持つ理由としては『摩擦によりかぶれる』『汗を吸わないイメージがある』『医師から肌トラブルの原因となるという指摘を受けた』などの回答が得られ，一般消費者は化学繊維が肌トラブルの原因となるという認識を持つ人が多いことが明らかとなった。また綿に関しては，『肌に優しい』『安心感がある』『自然なものを着せたい』という回答や，幼児保護者を対象に行ったヒアリング調査では上記の意見のほかに『保育園で持参品が綿100%に指定されているため，綿が幼児にとってよいものだというイメージがある』などの意見が得られた。

肌着素材による肌トラブルの要因は繊維組成以外にも考えられる。例えば綿は優れた肌着素材であるが，乾きにくいため，湿った肌着を着用し続けることによる衛生面への懸念や体が冷えてしまうというデメリットもある。こうした繊維の特性や，素材にかかわらず乳幼児の肌着はこまめな着替えが必要であることなど，「着方」に関する乳幼児の保護者への情報提供が必要であると考える。

3-4　縫い目部分について

肌着の縫い目部分を重視するかどうかについての集計結果を図12に示す。8割弱の保護者が「重視する」，「やや重視する」と回答しており，「重視しない」と回答した保護者は 1%ほどであった。このことから，縫い目に関してはかなり神経質になっていることがわかる。縫い目部分が身頃や袖などの1枚の布で構成されている部分に比べて硬いことは，日常の衣生活の中で常識的に認知していることが関係していると考えられる。また，3-2 で述べたように，「縫目との摩擦」が原因で肌トラブルを起こしたと回答した人が17%程度存在した。このような経験も大きく影響しているといえる。

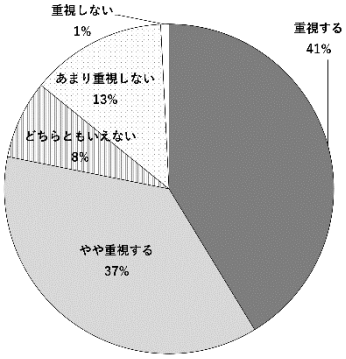

図 12　肌着の縫い目部分を気にするかについての回答結果（n=247）

「重視する」，「やや重視する」を選択した回答者に対し，具体的に縫い目部分がどのようになっているものを選ぶかを質問したところ，73%の保護者が『縫い目が外側になっているもの』『縫い目が袋縫いのもの』など縫い目や縫い代が直接肌に触れないものを選ぶと記述していた。一方で，『縫目が外側のものを選びたいが袋に入った状態では判別できない』という指摘もあった。縫い方以外には，『やわらかいもの』『なめらかなもの』など触感に関する記述が多かった。

このような観点から，最近では縫い目のないシームレスの肌着が多く出回ってきている。シームレス肌着は多くは大人用のもので，乳幼児肌着にシームレスのものはほとんど見られない。シームレスの衣服は接着材を使った接着縫製という手段で製造され

る。接着剤の問題などもあり，乳幼児肌着は従来通りミシン縫製で製造されていると思われるが，物理的刺激の少ない縫い目部分の工夫が今後も必要であるといえよう。

4．結言

本研究は乳幼児の保護者を対象に，乳幼児の肌着に関する意識調査を行い，乳幼児の肌トラブルの実態や肌トラブルの原因となる衣服の特徴，肌着の購入にあたって重視する点について報告したものである。その結果，肌トラブルを経験する乳幼児は多く，特に1歳以上の幼児になると肌トラブルを経験した割合が多くなることがわかった。子どもの肌着の選択時には「素材」，特に「綿100%」であることを重要視する保護者が多いが，用途によっては必ずしも綿 100%が適しているとはいえない。販売されている乳幼児用の肌着は，ニット製品が多く，実際に活用しているものと思われるが，保護者のニット製品を選択しているとする回答は低く，繊維や布に関する知識が必ずしも十分ではないことが明かとなった。

現在は縫い目のない肌着なども多く販売されているが，今後も乳幼児の肌トラブルに配慮した製品の開発が求められる。それと同時に，乳幼児の保護者に対しても素材についての知識を深められるような販売活動，啓蒙活動によって，適切な肌着を選択してもらう必要がある。

謝辞

アンケートにご協力いただいたきららっこ石神井公園保育園，のびっこ保育園，豊明幼稚園，さくらナースリーの保護者の皆様，ナチュラルサイエンスの社員の皆様，ナチュラルサイエンス主催イベント参加の皆様に心より感謝申し上げます。アンケートの作成とデータ集計をお手伝いいただいた遠藤冴華さん，金田理穂さん，坂西まことさんに感謝いたします。

参考文献

1）ちょっと注目 衣料品による皮膚トラブル：化学製品 PL 相談センター アクティビティノート，**276**，1-2 (2020)

2）衣服による皮膚障害：成瀬正春，日本衣服学会，**50**，3-8 (2006)

3）乳幼児のスキンケアに関する研究 ―シュガースクラブの効果―：山口求，今村美幸，松高健司，光盛友美，日本小児看護学会誌，**18**，59-64（2009）

4）衣服による皮膚障害と肌にやさしい衣服の認知度 ―東海地区の女子大生―：成瀬正春，内田有紀，平岩暁子，繊維製品消費科学会誌，**47**，764-771 (2006)

5）衣服による皮膚障害の最近の動向 1981年調査との比較：山田由佳子，新宅桂，奥窪朝子，大阪教育大学紀要 第 2 部門 社会科学・生活科学，**49**，123-136 (2001)

6）衣服による皮膚障害に関わるユーザーの衣生活態度 ―皮膚障害の防止対策実践および普段着の着用に関する意識に注目して：山田由佳子，坂東 夢希，奥窪朝子，大阪教育大学紀要 第 2 部門 社会科学・生活科学，**49**，137-150 (2001)

7）衣服による皮膚障害と変遷：三ツ井紀子，千葉大学教育学部研究紀要，**60**，47-53 (2012)

8）山名信子他乳幼児用の肌着の着用実態に関する研究：山名信子，岡部和代，御前三歩，銭谷八栄子，繊維製品消費科学会誌，**33**，558-565（1992）

9）衣服着用時に発生する皮膚障害とその原因 ―アンケート調査からの一考察―：土田百恵，水谷千代美，大妻女子大学家政系研究紀要，**54**，39-48 (2018)